

## 第5章 中興期I 厚い選手層、合理的練習方法で実力向上 年表

- 1974年 (昭和49年) 秋季リーグ戦で1部に復帰
- 1975年 (昭和50年) 春季リーグ戦で日大戦で勝利を手にしたがポイント差で最下位となる。入替戦でも青山学院に敗れ2部降格
- 1976年 (昭和51年) 春季リーグ戦で第1部に復帰  
韓国に初の海外遠征をおこない、韓国ナショナルチームに勝利
- 1977年 (昭和52年) 慶早定期戦で14年ぶりの勝利  
女子秋季リーグ戦で2部に昇格
- 1978年 (昭和53年) 秋季リーグ戦で2部2部昇格
- 1979年 (昭和54年) 女子春季リーグ戦で2部優勝し、入替戦で学芸大を破り19年ぶりに1部に昇格
- 1980年 (昭和55年) 女子春季リーグ戦で2部降格
- 1981年 (昭和56年) 8月、関西 (サントリー、近畿大学) に遠征  
秋季リーグ戦2部優勝
- 1982年 (昭和57年) 春季リーグ戦1部復帰  
創部40周年記念式典 (青山ダイヤモンドホール)

## 概説

1975年(昭和50年)前後の当部の雰囲気は、創立40周年記念の部誌の中の細田さん(昭和52年卒)の発言を引用すると「練習にも熱気があり、また1部に絶対には上がるんだという意気込みがありました。またその頃同好会のチームが著しくなってきた時期でもあったんです。我々は学校を代表している体育会なんだ、またおおげさにいえば各大学の体育会学生が日本のバドミントン界を作るんだという気構えも強く持ちましたね。」ということになる。このような雰囲気の中で昭和49年秋にはリーグ戦で2部優勝を飾り入替戦で青山学院を4—3で下し6年振りの1部復帰を果たした。その後、昭和50年春には日大戦で劇的な逆転で1部での貴重な勝利をおさめたもののポイント差で最下位になり、入替戦で敗れ2部に降格した。しかし、昭和51年春に1部復帰を果たしたのち昭和53年秋まで1部に定着した。しかし1部校の壁は厚く個々には善戦した試合も多く、3ポイントを取り勝利に王手をかけた試合も何試合かあったが今一步のところ勝利を手にすることはできなかつた。この間、入替戦では昭和49年秋から昭和53年秋まで9回連続青山学院との対戦となった。特に昭和53年秋の入替戦では0—3のピンチから劇的な逆転勝利で1部を守った。昭和54年秋から昭和56年春まで4季連続2部2位で、昭和56年秋には2部優勝を遂げたものの1部復帰はならなかつた。しかし昭和57年春には全勝で2部を制し入替戦では青山学院を4—0で下し創部40周年の年に念願の1部復帰を果たした。一方、長い間低迷が続いていた女子であったが昭和52年秋には2部に昇格し、昭和54年春には昭和35年春以来19年振りの1部昇格という快挙を遂げた。

1部に昇格した昭和51年には慶応義塾体育会バドミントン部史上初の海外遠征が行われた。昭和51年8月、平部長・大嶋監督(現金原)・鈴木(英)コーチ・平井先輩・梶田主将以下現役13名で韓国に遠征し、8月27日、馬山で合宿中の韓国ナショナルチームと対戦した。ダブルス2試合を先取した整チームはシングルスでも健闘し結局4—3で整バドミントン部の海外初勝利を手にしたのである。

この頃も相変わらず入試難が続いていたが地道な推薦活動の成果でインターハイ出場選手が各学年に何人か入り、また3—4年に1人は諏訪選手・馬場選手のように高校時代の実績を残した選手が入部したためにその選手を核に部員全員が慶早戦勝利、1部復帰といった目標に向かって努力し高校時代に実績のない選手も高学年になるに連れて実力をつけていった時代であった。このチーム全員の目標へ向かっての努力が実を結んだのが昭和52年の慶早戦だった。夏の小松の合宿で慶早戦に焦点を絞り実戦練習に重点を置き十分に練習を重ね宮崎主将以下一丸となって臨んだ結果、11—4で圧倒し慶早戦の連敗に終止符を打ち対戦成績を12—13(当時)としたのである。

昭和50年の半ばになるとリーグ戦の雰囲気も徐々に変わり出した。リーグ戦名物であった「ラツシヨイ」の応援も禁止となり応援の様子も一変した。昭和53年には背面ネーム入りのユニフォームの着用が義務付けられた。また練習もウエイトトレーニングの導入、VTRの利用と近代化され始めた。昭和57年の1部復帰にはVTRにより対戦相手を研究したことがおおいに役に立った。

このような時代の流れの中で我が部もチーム最優先から個人個人を尊重するように徐々に変化し始めたのが昭和56年—57年頃であった。

(茂木、粕谷 記)

## 苦難の歴史

河俣 信行 (昭和52年卒)

半世紀の歴史を経て、塾バドミントン部が記念の時を迎えたことは、喜ばしいことである。一口に50年といっても、私自身の入部した年が30周年であったことを言えば、40歳近くになっても、その歴史の半分も知らないわけであり、そう思うと歴史の重みを改めて感じる次第である。

こうした記念の冊子にペンを執らせていただけるとは、光栄である。しかし、輝かしい塾の歴史に反して、私自身の在籍時の1ページは苦難の歴史であり、一筆啓上する類のものはないのが本音である。さりとして、それも長い歴史のなかの1ページとして、こんな経験者もあってよいのではない、紙面を埋めさせていただくこととします。私が入学した1972年(昭和47年)は、前述のとおり、バドミントン部30周年であった。当時は関東リーグの2部上位に位置し、立教、関東学院等と争い1部復帰をめざしていた。前年の成績も、慶早戦で惜敗したものの、若手の台頭目ざましく、1部復帰も近いと期待されていたと思う。

そんな中で、私を含め、数名の新入生も期待されて、入部したと記憶している。現在もそうだが、インターハイ経験者の入部も厳しい状況のなかで、経験者が5～6名入部したのであるから当然かもしれない。

しかし、レギュラーとは、実力的に差があり、最後までリーグ戦にスタメンで出場する者はいなかった。それが苦労の始まりである。そんな中で、1年はあつという間に過ぎてしまい、苦しい時がさらに続くことになったのである。

我々の学年が実力的に、レギュラーになかなか追いつかないうちに、1年後輩が入部してきた。(彼らから後に、1部復帰の原動力となっていたのである。現監督の清水氏もその1人である。)最初からリーグ戦に出場する者もおり、先輩と後輩に挟まれた格好で、悔しい思いをしたものである。自分の実力不足であるから、如何ともしがたいと言えばそれまでであるが、情けないものであった。

私個人も1年時の慶早戦は出場メンバーに選ばれながら、病気で出場できなかつたし、2年時は惜しいところで、出場できなかつた。3年時も同様で、4年時が初出場ということであった。

その後の後輩も実力者が多く入部し、3年時は、最近20年以内では、かなり戦力が充実していたのではないかと思う。1部復帰を果たしたのも、この年であった。

現役当時の思い出は苦しいことばかりであったが、今にして思えば、後の人生の強い糧になっていることが多い。現在の自分を支えているものの多くが、現役当時の経験にあると感じる。

名前を挙げればきりが無いが、大学のレベルの高さを思い知らされた、入学時主将の上野氏。弱い学年と言われるなかで応援してくれた岡本監督。大島監督。今はあまり音信はないが、心の友としていた横井氏。最後まで苦労を共にした笹岡氏。今でもよく連絡してくれる宮崎氏。プレーをともにしたことがなくとも、関西にすれば訪れてくれる後輩諸氏。数年前、兵庫でインターハイがあったとき、清水監督はじめ現役諸氏が訪ねてくれたときは大変うれしかったものである。等々。多くの友人知人がいるのも、私の財産だと思っている。

今は時効だと思いが、自分の不始末で卒業が遅れたときの経験も自分を強くしていったと回顧している。人間は幸福よりも不幸のほうが、鋼のように強くなるのではないだろうか？ 塾の現状も芳しくないかもしれないが、長い歴史は、そんなことを気にはしないだろう。むしろ今後のほうが楽しみではないか！

そういう意味で、100周年には、もう1度寄稿をしたいものである。

---

## 1部昇格入替戦

梶田 敏夫 (昭和52年卒)

部創立50周年おめでとうございます。半世紀の間、現役とコートの外からサポートするOBが強い絆で結ばれてこそ、成し遂げられた偉業と考へ感無量です。来るべき60周年70周年も塾バドミントン部にとって益々の繁栄となります事を祈り申し上げます。

さて私の現役時代の最高の思い出は1974年の秋季リーグ戦で青山学院大学を破り、5年ぶりに1部昇格を果たし、岡本監督最後のシーズンに監督を男にすることができたことです。秋季2部リーグ戦は立教大学に破れ4勝1敗でしたが、ポイント差で1位になり入替戦への出場を果たしました。桑野主将の采配のもと、中央区体育館で行われた青学大との入替戦を、リーグ戦終了後も良い緊張感を持続し、とてもいい雰囲気を迎える事ができました。各々の選手の力は互角でしたが、

いつも1部リーダのスピードあるプレーにもまれている青学大相手に、我々の力を100%發揮できるかどうか不安でもありました。

さて試合当日、第1シングルスは主将同士の対決となり、ピリピリとした雰囲気の中で試合が始まりました。桑野主将はいつも通りのポーカーフェイスで、時折気合いをいれるための奇声を発しながら試合を進めます。一方、青学大長島主将の打つスワッシュは桑野主将と塾ベンチの執念が乗り移ったかのようにミスショットとなり、バックラインを大きく割るケースが目立ち、終始優勢のままフルセットの末、ポイントを取りました。第2シングルスの相手はオーソックスなプレーをする笠野選手で、私の得意とするタイズの選手でした。先勝の勢いをなくさない為にも絶対に落とせないポイントでしたが、緊張の割りには冷静にプレーでき、考えていた以上に楽な試合展開で、シングルスを取取る事ができました。その後、3つのダブルスは勝てそうな試合を落とした事もあり1—2と負け越し、通算3—2で後半のシングルスにずれ込みました。第3シングルスの宮崎君は夏合宿を経て急速に力をつけてきた塾期待の新人でした。相手の遠藤選手は左利きの特徴を活かした粘り強い、宮崎君と似たタイプのプレイヤーでした。長いラリーが続く宮崎君得意の展開になりましたが、残念ながらあと1歩のところまで及ばず、フルセットの未破れました。いよいよ3—3のイーゼンとなり泣いても笑っても最後の勝負は、我が親愛なる同期の茂木君に持ち越される事となりました。実力では青学大の畑中選手を上回ってはいましたが、異常な雰囲気の中で『普段の力を發揮してくれよ』と、ただ祈るような思いでした。ベンチの不安をよそに親愛なる同期は鬼のような強さをみせ、弱気の相手を圧倒し我々に4—3の勝利と1部昇格をもたらしてくれました。終わった後、皆で抱き合って歓喜した瞬間は今でもまるで昨日の事のようにあざやかによみがえってきます。試合終了後、岡本監督のオフイスで祝勝会を行い、浴びるほど酒を飲んだ事、その年の納会が1部復帰のお祝いの意味もかねて青山のダイヤモンホールで沢山のOBに参加いただき盛大に行われた事も良い思い出です。

我々の勝利は岡本監督、金原（旧姓大嶋）・鈴木両コーチを始めとするOB諸兄は勿論、レギュラーを支えてくれた仲間の応援によるものであった事を、今改めて感じると共に、私にとっかけてかえのない思い出を残してくれた試合に出場できた幸運を感謝してやみません。

最近のOB通信によれば男子も女子も低迷が続いているようですが、現役諸君に置かれては塾バドミントン部が人間形成の場である事を決

して忘れずに、試合結果のみに拘ること無く、悔いを残さない様に青春をバドミントンに掛けてくれたらと思います。

ロンドンに勤務して早5年半が経過しました。突き出てきた腹を擦りつつ、バドミントンと共に過ごした我が青春時代を少々ほろ苦い気分に戻りながら、再び日吉記念館に立てる日を楽しみしております。

## 慶早戦13年ぶりの勝利

宮崎 克巳 (昭和53年卒)

入塾以来、慶早戦はもとより関東リーグ戦でも早稲田に勝ったことがない。私の場合、野球の慶早戦さえも、球場へ応援に行くというも負けてばかり。実力差が相当あるのならともかく、ほとんど同レベルなのに団体戦になると早稲田の野武士的しぶとさに苦杯をなめつばなし。「負け犬のまままで終りたくない、何としても早稲田に勝ちたい。」3・4年生それぞれの心にきざまれたこの強い意志が、1・2年生の心にも確実に伝わり、慶早戦までの夏期練習を支え、試合本番で100%の力を発揮させたのだろう。

しかし、14年後の今考えてみると、“強い意志”もさることながら、全てがこの勝利に向けいいように回りかみ合うという、そうざらにはない幸運に恵まれていたように思う。

### 1.前年の思わぬ慶早戦敗退

前年の慶早戦は本当に悪夢だった。個々のレベルは完全に相手を上回っていたが、早稲田には地元の体育館で、それも前評判どおり負けでなるものかという気概があったのだろう。何となく勝てるだろうと思っていた我々は、相手の必死の形相にあえなく6対9で敗れてしまった。しかし、この敗戦こそが翌年の勝利への大きな伏線となったのである。我々に、必死になれば思わぬ力が発揮できることを、早稲田が目の前で教えてくれた。しかし、必死の勢いというのは長く続かないのも確か。早稲田にしてしかり、しかも今年の試合会場はあの天井の高い、慣れない者にはやりにくいことこの上ない日吉記念館。実力は5分と5分だが、我々が勝つために必死にあらゆる努力をすれば6分4分（早稲田は前年で必死の勢いを使い果たしているはずだ。）加え地元地利で7分3分で勝てる。13年ぶりのチャンス到来。やるしかない！

## 2. 過激な提案から異例の夏合宿へ

そこで私は、夏前、渋谷の某喫茶店に幹部を集め「夏休みを返上、帰省もせず勝つために練習をやるもうじやないか」と提案したのだが「練習は量じやない。例年どおりの日程で中身を濃くすればいいんじゃないか」という全く予期せぬ反論が出たのである。私の提案は自分で思っているより過激な提案だったのである。前しか見えない強さというか頑固さで自論を曲げず強行突破しようとする私。もしこの時、慶早戦のコート上に自分では立つことのない4年生の「自分は試合にも出られないし偉そうなことは言えないけど、もし出られるなら夏休みを返上してでも練習して勝ちたい。でも、個々それぞれの考え方や事情もあるしなあ…」という一言がなければ、私1人が先走り後を見たら誰もいない状態になっただろうし、試合に出る選手たちも、全部員の期待を担っているんだという強い自覚は持てなかっただろう。その後、もう1度考え話し合った結果下級生強化が中心だった夏期練習を慶早戦レギュラー中心の練習とする。その分下級生は8月前半に例年より早く集合し強化練習を行なうことで意見は一致した。こうして松任市での夏期合宿は、3・4年生がああ2対1・6面回しでコートにはいつくばるといふ異例の夏合宿となったのである。

## 3. オーダー大成功

夏期練習の手応えは十分であった。後はオーダー。オープンオーダーだけに駆け引きが重要、1発屋だがムラのある3年生橋本を早稲田の3年生エース亀谷にあてたい。慶応の3年生エース木村は亀谷には分が悪いが、他の選手になら勝てる。とりこぼしの危険性がある橋本だが、亀谷に勝つのは調子の良いときの彼しかない。春先からこう考えていた私達は、橋本が急成長している。慶応の3年生エースは橋本だという情報を事あるごとに流し続けていたのである。(急成長していたのは事実、エースというにはまだムラがあっただけである。念のため。)この効果があったのか、早稲田側の去年勝っている余裕があったのか、また開催側に対する遠慮があったのかはわからないが、慶応側の要求がすんなり通り、願ってもないオーダーが実現したのである。

## 4. いざ出陣。11-4の大勝利

そして、昭和52年9月の慶早戦当日。いざ出陣。いつものようにかけ声をかけながらランニングアップしていると早稲田チームとすれちがった。いつもたくましく見える早稲田が小さく元気なく見えたのである。それを感じてか、益々はつらつとかけ声をかける我チームの選



手達。この時私は勝利の手応えを十二分に感じ取った。結果は11対4の大勝利。勝利の瞬間の光景が今でも鮮明に浮かぶ。平部長、岡本前監督、大嶋監督をはじめ影となり日向となり私達を支えて下さったOBの方々、俺達の方まで強くなってくれと練習のめんどうを見てくれた50～52年卒の先輩たち、裏方に徹してくれた部員たちが積年の夢と努力で造った舞台上「慶早戦13年ぶりの勝利」というドラマを演じられた私達はほんとうに幸運だった。

## 青学との入替戦

木村 徹 (昭和55年卒)

私は1975年入学と同時に入部しました。当時、塾は1部でした。確か私が高3でインターハイに出場した時、勧誘に來られた笹岡主将は、1部に昇格するんだ、又その可能性は充分にあるという事を熱弁していた様に記憶しています。実際私が入部したときは、前年秋のリーグ戦で2部優勝、そして1部最下位の青学との入替戦に勝ち、1部昇格というラッキーなスタートでした。

まず1年の春のリーグ戦、塾は初戦の日大戦において、すさまじい気迫を見せ、3対3で迎えた第4シングル、私の同県人(石川県出身)でもある柳本先輩が激戦のうえ勝利し、塾に1部1勝をもたらしたのであった。この時、これで1部残留と思ったのは私だけではなかったと思う。その安心からという訳でもないだろうが、その後4連敗、結局1勝4敗ポイントでわずかに日大に劣り1部最下位という結果に終わった。そして、昨年の秋に引続き、青学との入替戦、塾は昨年の仇討ちをされた格好となり、2—4にて敗れ、2部降格という苦汁を飲まされたのだった。これが、春・秋、年2回の青学との定期戦の始まりだった。

秋のリーグ戦 (このリーグ戦より私もレギュラーとして試合に参加) 2部では圧倒的な強さを見せ、5戦全勝。この時、やはり1部でプレーしなければと思ったものでした。そして再び青学との入替戦。青学の1部への執着心が勝ったのか、塾は2—4で敗れまして2部生活を余儀なくされたのだった。それからというもの、梶田主将を中心に1部復帰を目指し、毎日、きびしく、激しく、苦しい練習が続きました。と言ってもそれは他人事で私は練習中よく吐き、練習をエスケープしたものでした。この苦しさから逃れる術を覚えた私は、そ



の後何度も同じ手を使い練習をエスケープする事となる。今から思えば何とも情け無い話である。

話は余談になりましたが、私も2年生となり下級生が入部し、そうそうバカな真似も出来なくなつて迎えた春のリーグ戦、2部においては実力の差を見せつけ優勝、そして恒例となった青学との入替戦に完勝し、1部昇格!その後、代が替わつて宮崎主将、それから私が主将を務めた2年間で、梶田先輩の時に比べると、小粒になったとはいえ、青学との定期戦には勝ち続け、1部の座を守り通したのだった。そして私にとっては最後の秋のリーグ戦、相変わらず定位置(6位)に終り9季連続で青学との定期戦を迎える事となる。他の選手のガンバリを横目に、私は例の練習エスケープ病の後遺症とでも言うか、精神的な弱さをさらけ出し、ダブルス・シングル共に敗れ、結果2—4で2部降格という最悪のプレゼントを後輩達にしまったのであった。あの時の情けなさ、惨めさは13年過つた今でも決して忘れない。

最後に史上最悪の主将だった私だが、あえて現役諸君に言わしてもらうなら、少しでも上を目指して、練習して、練習して、汗を流して、涙を流して、めしもノドを通らないくらい練習して、本当の意味でコートの中で吐くぐらい練習して、その中から自信というか、精神的な強さを身につけてほしい。以上。

ガンバリ!!

## 女子1部復帰への道(バドミントンと私)

茂木(中村)百合(昭和55年卒)

4年生1名、1年生4名—私が慶応大学のバドミントン部に入部したときの女子部員は、合計5名でした。1人はすぐやめてしまったので、入つてすぐの春季リーグ戦は、ギリギリの4人での出場でした。1浪していた私はアップのランニングにもついてゆけない程、体力がありませんでした。そしてリーグ戦—3部の試合は1日に2校と対戦するので、ダブルスとシングルで4試合をこなすにはいけません。シングルでファイナルになるとバテて負けてしまい悔しい思いをしました。

1年生は雑用や罰則がたくさんありましたが、受験でバドミントンが出来なかった時のつらさを思えば何をやっても楽しくて仕方がありませんでした。良い先輩や仲間に関まれ夢中で練習して、新人戦のB



1979年(昭和54年)5月  
1部昇格祝勝会

後列  
伊藤(藤田)・後藤・川村(大関)  
・波多野(山本)・松尾(松田)  
前列 茂木(中村)・荒木(笹野)

フロッグで優勝したときは本当にうれしかったです。

2年生になって頼りにしていた渡辺さんが卒業されて、後藤さんが入部しました。3年生、4年生不在の心細い出発でしたが、時にはやんちゃ坊主のような彼女の明るさに落ち込みそうになるのを随分助けもらったような気がします。52年の春のリーグ戦は3部5位であわや4部かという暗い雰囲気でしたが、それから秋まで宮崎主将のもとで、よく走り、ほとんど休まず練習にはげみました。そして秋季リーグ戦で3部優勝、2部復帰という、うれしい結果を得ることが出来ました。

次のリーグ戦は、小豆沢の体育館で出来ると思うと、それだけで胸がワクワクしました。

53年に松田さん、54年に笹野さんが入部して、女子もやっと6人になり、充実した練習が出来ようになりました。そして54年の春季リーグ戦において念願の2部優勝を遂げ、学芸大学との入替戦では、オーダーが当たり、3対2の接戦でしたが、追う者の勢いで1部復帰という思ってもみなかった成績を残す事が出来ました。試合中は応援にも力が入り、コートに入っていない時も1本1本自分が打っているようでした。第3シンドルスの後藤さんがラストの1本を取ったときみんなの様子が今でも映画のスローモーションのように頭に浮かんできます。縁の下の力持ちで頼もしい大関さん、スワッシュェが大好きな足の長い山本さん、おちやめな後藤さん、元氣印の松田さん、頑張り屋の笹野さん—みんな涙でくしゃくしゃの笑顔でした。

でも、現実の1部の壁は厚く、秋季リーグ戦では1ポイントすらあげることは出来ませんでした。入替戦で残留はしたものの、実力の差を思い知らされました。出来ればもう1度1部で試合を試みてみたいという思いが残りました。でも4年間のうちに3部、2部、1部を体験出来たことは、貴重な経験だったと思います。

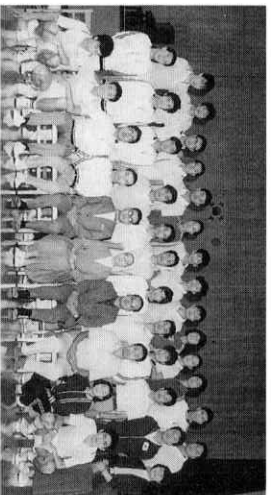
在学中に「体育会は勝たなくてはいけない。経過より結果が大事だ。」と言われた事がありました。私はずっとこれに疑問を持ち続けていました。そして今もやっぱり「結果より経過が大切。」と思っています。結果がよかったからそう言えると言われたこともありましたが、たとえ3部のまま終わっても体育会バドミントン部で充実した時を過ごしたと胸を張って言えたと思います。

とにかく一生懸命、体当りで過ごした4年間でした。いろいろな犠牲も払いました。つらい事を忘れる為にシヤトルを追っていた時もありました。バドミントンは倒れそうになった時の私の支えでした。私の青春は記念館とラケットと共にあったと思います。そしてめぐり逢った先輩、仲間、後輩達とのつながりをこれからも大切にしていきたいと思います。

1日1日の練習の積み重ねが歴史の新しいページを作ってくれます。50周年を迎えるにあたりまして、より素晴らしいページが綴られていくことを、心からお祈りしています。

## 韓国遠征の思い出

諏訪 芳博 (昭和56年卒)



1976年 (昭和51年) 8月  
韓国遠征

日本学生バドミントン界のルーツ校として誕生した我が部が、諸先輩たちが築き上げられた栄光を受け継ぎ、創立50周年を迎えることに対し、心よりお慶びを申し上げます。この記念すべき時に、筆を執ることができたことを光栄に存じます。

私が現役として在籍していた当時を振り返って、思い出を思い起こしてみると、

### 【汗と涙にまみれた究極の夏合宿】

【叱咤激励の嵐と化した日吉の丘】  
などがあげられるが、今回は特に当部初の海外遠征である『韓国遠征』について私の思い出を書き記したい。

私は、1976年4月に北陸福井から花の東京に上京し、ペンを持つ暇もなくラケットを持ち、シヤトルコックを追いかける毎日であった。幸運にも1年生からレギュラーとしてリーグ戦等にも出場できたが、当時は4年生に梶田さん (現第一勧銀勤務)、3年生には宮崎さん (現サントリー勤務) がいらっしやり、戦力的には近年にないほど充実していた。

当時は、春のリーグ戦で数年ぶりの1部昇格を果たし、関東選手権でもベスト4に食い込む等輝かしい戦績であった。

この勢いの中、当年8月下旬から平部長先生を団長として総勢17名の韓国遠征が実現した。4年生中心のメンバー構成の中、下級生とし

て当時2年生の木村さん(現ねほけ勤務)とともに1年生の私が参加できたことは大変嬉しかった。

下級生として参加したのだから、毎日上級生の洗濯や食事の用意等ばかりかと覚悟はしていたが、そこはやさしい諸先輩たちで、公式試合は出場できなかったものの、ちゃんと練習だけはさせられたのである！

だから、試合の思い出はあまりないが、遠征の主目的である試合について書かないわけにはいかないから、1つだけ特記する。

それは、相手が今を轟かせる韓国ナショナルチームであったことだ。今は、世界のトップクラスの選手がひしめく韓国チームだが、当時のレベルは現在の韓国バドミントン界のレベルを想像することが困難なぐらい低いものであった。そのために、当然のことながら公式試合は4—1で慶応義塾の勝利であり、翌日ナショナルチームから再試合を申し込まれる程の圧倒的なものであった。

さて、試合以外の思い出は夜の宴会等いろいろとあるが、今でも忘れられない強烈な印象が3つある。

1つ目は韓国の政情不安。当時の韓国は北朝鮮の侵略に備えて戒厳令がしかれ、午前0時以降の外出は厳禁(これがなかなか辛いものがあった)となり、ホテルの窓から見えるものは武装した兵士のみ。平和な日本で生活できることの喜びを噛み締めたものである。

2つ目は、韓国の食生活の貧しさ。韓国イコール『焼肉』または『キムチ』といわれるが、それ自体はまずくはないが、辛さで味覚音痴になってしまっているようだ。また、米もほとんどなく、粟・稗ばかり。帰りの飛行機内で食べた寿司のうまかったことは忘れられない。

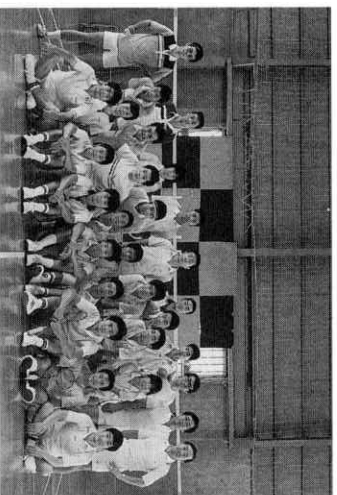
3つ目は、文字。まるで絵記号で全く理解できない。レストランに入って平先生が一生懸命注文してくださった時は、さすが大学教授だと感心したものである。

このように、試合に勝つとともに、日本の素晴らしさを認識できた有意義な遠征。この遠征に際してOB諸先輩から多大な援助を戴いたことに対し、改めて厚くお礼申し上げます。

最後になるが、今後の体育会バドミントン部の益々の発展と、OB諸先輩・現役諸君のご健勝を祈念して筆をおくこととする。

## 合宿

大柳 英樹 (昭和56年卒)



1980年 (昭和55年)  
夏合宿 (岩井)

昨年の夏も終わりに近づいた日に久し振りに「合宿」と言うものに参加してみた。とは言っても、私達が共通語としている「合宿」ではない。青年会議所の新人会員を中心とした夏期合宿であり、テーマは「男のバッチワーク」であった。たまたま青年会議所の会員開発委員会 (新入会員の勧誘並びに教育を担当する委員会) に所属したところ、副委員長女史が運良く (?) バッチワーク教室の先生であった為にこの様な巡り合わせとなってしまったのである。全くの素人どころか、これまで針と糸など縁の無かった男連中ばかりというので、初歩のクレイジー・キルトなどと言うものを創ることとなった。僅か30センチ四方のキルトを縫いあげるのに、何時間も費やしたことを記憶している。「何と馬鹿げた事をやっているのか」と、お叱りになられる方も多いかも知れないが、私としては充分満足した1晩であった。目的は30センチ四方のバッチワーク25枚の集合体である壁掛けであり、また、共同作業の中での同期入会メンバー相互の親睦であったからである。いろんな場面で、当然、会社の中でも共同作業を行なう機会が多い。しかし、それらの作業は殆どの場合分業化され、皆が同じ作業を行なう機会というのには皆無に等しい。この様な観点からして、このバッチワーク合宿は私にとって非常に懐かしく感じられ、また、新鮮にも感じられたのである。

さて、本題の「合宿」についてであるが、私個人としては非常に「合宿」が好きであった。今でも時々同期のメンバーにこう言われる。

「合宿の時お前は、みんなが疲れてくるのに反して、元気になっていった。」と。私としてみれば合宿が進むにつれ特に元気になっていった記憶はないが、体の疲労に反してアレーが上り調子になっていったのは事実である。何故なら、私が合宿で求めたものは新しいシヨットではなく、自分のシヨットの精度であり、精度を上げるための動きを身に付けることであつたからである。合宿が進むにつれ筋肉は疲労するがその分動きのロスが減るし、連続した練習により神経は研ぎ澄まされるから、自分が求めるシヨットの精度が上がるのは当然といえる。

自分は決してナルシストであるとは思わないが、このような状況が好きであったから合宿も好きであった。

ところで、いくら合宿が好きとは言え、私も辛いことが無かったと言える程脳天気でもなかった。辛いと感じた時は極力こう考え事にしていった。「日がな1日好きなことをやってる、好きなことができる。」と。殆ど講義にでなかった私ですら、つい自分に対し、「普段は炊事・洗濯・家庭教師など結構忙しく、1日中バドミントンに浸かっている訳にもいかない」と言い訳しがちだからであった。合宿では、自分にもいいわけのしようが無く、やるしかないのである。

ここで、現役諸君に一言。こんな事を書いて、諸先輩方にお叱りを受けるかもしれないが、合宿の第1の目的にチームの勝利を置くのはやめた方が良いと思う。全体(他人)の心配をする前に自分の勝利、自分のプレーを第1の目的にして合宿に参加して欲しい。そうすれば必ずから何をすべきか解るし、合宿が好きになると思う。チームの勝利に関する悩みは監督と主将に任せ、合宿では思いっきり自分の為の練習に集中して欲しい。

最後に、「合宿」で制作した男のバッチワークは後日私の会社のロビー展に出展され、現在は1990年度の七尾青年会議所理事長宅の壁を飾っていることをご報告して筆を置かせて頂きます。

---

## 信じられん!!

大西 紀幸 (昭和57年卒)

これが我々の印象だった。

1978年の1・2部入替戦での対青学戦に於て、我が部は2—4と惜敗し、2部降格が決定した。私が入部したその年の出来事である。愛知県というバドミントンのレベルが低い県出身の私にとって、あの滅法強い4年の諸先輩(当時木村主将)が敗れるのに直面し、シヨックを受けた。しかし、主力メンバーの4年生が大半(?)ご卒業されたその後踏んばりどころであった。主将には高校時代に全国に名を轟かせた諏訪さんがなられた。

当時レギュラーになるための登竜门的練習である2時間の2:1ラリーというものがあり、高校時代の有名選手が殆んど存在しない我部にとっては、まさに「練習は不可能を可能にする。」という精神で実行せざるを得ない状況であった。

部員は皆、口では「2：1などやりたくない。」と云いながらも、なんとか2：1のメンバーに選ばれたい、強くなりたい、と思っただに違いない。そしてその思いが部全体の志気やレベルアップにつながっていたのではないかと思う。しかし、そんなつらく厳しい練習をしたにも拘らず、諏訪主将当時、春2部4位、秋2部2位という結果となっていました。その翌年、(1980年)藤田主将の時、高校総体優勝の馬場君が入部、また昨年の主力メンバーが殆んど3年生だった事もあり、いよいよ2部優勝、1部昇格をと活気づいた。

ところがである、この年は春秋連続2部2位、翌年の春も2部2位となり、4季連続2部2位という結果となりました。

遂に、自分達の時代となった。藤田主将時代レギュラーの大半が4年生だった為、どうしても下級生の戦力アップが課題となった。

その為に、今まで以上の厳しい練習が強いられた。「練習日不可能を…」である。この頃から本格的なウエイトトレーニングが組込む様になった。ところが、その練習の厳しさが極まり、部員の中から「もっと自主的な個人練習の方が強くなるのでは…」という声が聞かれる様になった。そんな時、当時の鈴木監督は私に云った。「主将の任務はチームを強くする事であり、1人を強くする事ではない。」

その後、合宿でも豊田自工(長谷川先輩)や、サントリー(山本、宮崎、森下先輩)に強力なお力添えを頂き、部全体はメキメキ力をつけた。いよいよ秋のリーグ戦。リーグ戦では部員全員がよく頑張りがつと久し振りの2部優勝を果たした。夢にまで見た1部昇格まで入替戦のあと1勝である。対戦相手は、あの青学である。戦前の予想では我が校の圧倒的勝利。1部昇格もまず間違いないとされていた。

そして入替戦、7戦(S4、D3)で4戦先取で勝ちとなる。案の定、我が校は有利に試合を選び、4戦して3—1とリードし、あと1勝1部昇格である。ところがである。青学も苦肉のオーダーで、最強ダブルスを第5試合(第3ダブルス)に登録していた事もあり、なんと3—3のタイに追いつかれ、最終試合も青学に傾いた流れを止めるべく奮闘したが、惜しくも敗れ、この瞬間、2部残留が決定した。その日この眼で1部昇格を見届けようと大勢の先輩が、御多忙中にも拘らず応援にかきつけて下さったのに、何と情けない、何と申し訳ない試合をしてしまったのである。今1歩、力不足でした。

しかし、無名集団の我々でさえ、ここまでたどりつけた。これからも、もっと上を目指し、そして再び1部優勝の名誉を奪い取ってほしいと思う。



私にとつては入替戦で敗れた悔しさは、一生忘れることが出来ないであろう。私が慶応を卒業してから9年が経つ。それでも、今あの時の涙、それに合宿での出来事、公私ともにお世話になった先輩の事等々、想い出が一杯である。

1部昇格は出来なかった。しかしその分人生を教つたような気がしてならない。

## 1部復帰

渡辺 俊二 (昭和58年卒)

昭和57年春、本塾と青山学院大との互いの意地と夢をのせ緊張の中始まった1部2部入替戦は、本塾のあれよあれよという快進撃によりストリートで決着がついた。

実に4年ぶりの1部復帰が、現実のものとなった瞬間である。丁度、創部40周年を迎えた年でもあり、記念式典に花を添えることとなった。あれから10年、早いものである。現役の頃のことかつい先日のことのようだ。

さて、今日は50周年を機に10年前当時を振り返ってみたい。

昭和50年代中盤、当時の本塾は毎シーズン1部復帰間違いなしといわれ続けながら、いつも後1歩のところまで涙を飲んでいった。特に昭和54年秋から56年春までの間は、4シーズン続けて2部2位と消化不良を起しそうなくらい悔しい思いをしたものである。その間の2部優勝は毎回入れ代っており、本塾の戦力的な安定度は群を抜いてはいたのだが、何故か優勝まではできなかった。やっとの思いで昭和56年の秋に2部優勝を果たすのであるが、この時の入替戦は私が最終シングルスであっさり負けてしまいみんなの夢を砕いてしまった。

そして迎えた57年の春、この年ばかりはOB諸氏もあまり期待してはいなかったようだ。私が主将であったこともあるが、戦力的に馬場君(当時3年生)のシングルス、ダブルスの2ポイント以外は、私を含め計算できない状況であったのだ。ただ、幸いであったのは、他校も前年に比べ戦力ダウンしていたこと、そして、計算はできないといえども層の厚さは他校を上回っていたこともあり、私としてはある程度の勝算を胸に秘め臨んだのである。しかし、シーズンに突入し蓋を開けてみると、やはりあてになるのは馬場君1人であった。結果はヨレヨレしながらも何とかポイントをとり2部優勝にこぎつくことがで

きた。

なにはともあれ再度青山学院との入替戦に挑戦である。前年は返り討ちにあったが、同じ誤りは繰り返さない。今度こそその熱い思いを胸の中をたぎらせ、熱のこもった練習をした。特に、この頃としては珍しかったビデオで対戦相手のクセ、攻撃パターン等を徹底的に研究した。これが大いに役に立ったのである。

いよいよ当日を迎えた。期待と不安が入り交じり膝が震えたのを覚えていいる。入替戦は1発勝負であり先手必勝である。先にムードに立った方が勝つのである。重責を担って第1シングルのコートに立った。プレッシャーからか唇が渴いたが、ゲームが始まった瞬間に勝利を確信した。そうビデオの画面で見たとおりの動きを相手が行っているのである。攻撃パターンからフェイントまで、手に取るように読めるのである。あつという間に勝ってしまった。こうなると流れは完全にこちらのものとなる。ベンチは大いに盛り上がり、お祭騒ぎである。押せ押せムードで一気に4—0のストレートで1部復帰を決めてしまった。我々も驚いたが、OB諸氏の驚きようといったらなかつた。急遽開いていただいた祝勝会もてんやわんやで、駆けつけてくださったOBの方々も皆信じられないといった表情であつた。

こうして長年夢にまで見ていた1部復帰を成し遂げることができ、OB諸氏からもお誉めの言葉を沢山頂戴した。私の学生生活の中で、褒められたのは、後にも先にもこの時だけである。あまり立派なものではないが、満足できるシーズンであつた。

10年たった今、本塾は3部リーグに降格してしまつたと聞く。大変残念なことであるが、現役諸君、がっかりすることはない。勝敗は兵家の常とも言ふ。くじけずに夢を常にもち続け頑張つてほしい。いつか勝つこともあるう。

次の60周年の時には、また誰かが、1部復帰の奇稿を書いていることを心待ちにしている。

## 素晴らしき快感の思い出

城戸 信弘 (昭和58年卒)

私が現役だつた1979～1983年頃のバドミントン部は、所謂「スポ根時代」から「スポーツ科学時代」への変化の時期にあつたように思います。

スポーツと科学とが切り離せない関係にある今日では、激しい長時間の運動に於て水分補給が必須であることや、どんな競技にも専門コーチによる科学的トレーニングが重要であることが常識となっております。ストレッチングやアイシング等、故障防止や疲労回復の手法についても随分研究が進んでいます。

ところが、私が新人の頃のバドミントンの練習といえば、そんな「現代の常識」など「軟弱」と一笑に付されるような、正に「根性」の世界でした。2—1や半面クリアは長くやることに意義があり、ラニンング・ダッシュ・筋力トレーニングは体の大小・体力にの有無に関わらず全員一緒、練習中に座ったり水を飲むのは以ての外、声出しを怠れば罰則の兎飛びといった具合いで、特に下級生にとってはバドミントンの技術を磨くというよりは根性を鍛えているといった毎日であったように思います。そんな「スボ根」の世界に幾分なりとも科学的なものを取り入れられ始めたのは、私が2年生になった頃でした。

USカレッジソフトボールの選手達が怪我の防止や筋肉疲労の回復のために行っていた「ストレッチング」もその1つです。また、練習の合間に水分を取るようになったのもこの頃だったと思います。しかし何といっても私にとって印象深いのは、トレーニング方法の変革です。下田・綱島・木月・クロカシ・並木ダッシュ等お馴染みの持久力トレーニングに加え、綿密にプログラムされたサーキットトレーニングが登場し、また筋力トレーニングでは、グラウンド横のトレーニングルームで器具を使ったウエイトトレーニングが始められました。

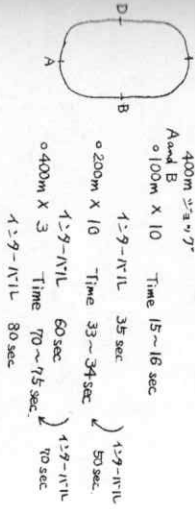
これら新しい形態のトレーニング導入に熱心に取り組まれたのは、加藤先輩だったと記憶しています。関係書物の調査だけでなく、当時その方面で先進的であった東京大学や筑波大学にも出向かれ、そこで得られた知識を基に実際にメニューを組んで練習に取り入れられました。加藤式トレーニングの第1の特徴は、常にその目標が明確にされていることとメニューの豊富さです。スピードの養成・最大筋力のアップ・全身持久力の向上・最大酸素摂取量の上昇アップ・エアロビックスとアナEROビックスの代謝をよくする…等々このトレーニングは何のためにやるのかということが1つ1つはつきりしていることです。

第2の特徴は、メニューの1つ1つに個人別目標値が設定されていることです。あるトレーニングを皆で同じようにやった場合、個人の能力差からある人にとってはきつすぎ、ある人にとっては楽すぎるということが必ず起こります。全員に効果的であるためには、個人の能力に応じ別々に目標値が設定されることが必要ですが、それが実践さ

れているだけでなく前回の実績に応じて毎回目標値が見直されるよう  
 になっていました毎日個人別メニューを作り直す加藤さんの苦労は想  
 像を絶するものがありました。私にとってこれらトレーニングが忘れ  
 られないのは、この「想像を絶する」加藤さんの苦労を1年後にトレ  
 ニング担当として引き継ぐ羽目になったからに外なりません。特徴  
 の3つめは、メニュー各々に「マスコットネーム」が付けられていた  
 ことでしょう。敏捷性トレーニング「8マシ」、スピード持久力養成  
 インターバル「日向ぼっこ」、全身持久力アップ反復トレーニング  
 「遠足」、指定ペースランニング「どうぞ私を止めないで」、オー  
 ラウンドサーキット「大の字の屈辱」、中でも極めつけ（内容のきつ  
 さも名前も）は反復ライオンライタンダッシュ「素晴らしき快感」略  
 して素晴感（すばかん）です。当時の経験者は名前を聞いただけでもそ  
 っとしませんか？皆からこんな愛称で親しまれた（？）トレーニング  
 の効果は、体力向上だけでなく現状のやり方に対する問題意識や、新  
 しいことに目を向けるといった形にも表れました。これは、決してそ  
 れまでのやり方を否定した訳ではなく、諸先輩に比べて実力的に頼り  
 ない自分たちが、今までと同じ事をやっていたのでは駄目だという危  
 機感の現れでもあったと思います。「科学的」にも弊害が無いわけ  
 はありません。ストレッチングの為に床に座るのは規律を欠く要因に  
 なりかねませんし、水を飲むことにより緊張の糸が切れることもあり  
 得ます。身体的に合理的であるとは解ついても精神的にどうであつ  
 たかというのは疑問な部分もあり、科学的＝万能ではありません。  
 「根性」無しに語れないものがあるのも確かです。ただ、私のような  
 実力も未熟、実績も無いものが幸福なことに1部リーダーでプレー出来  
 たのは、あの「素晴感」のおかげであると感謝しない訳にはいかない  
 気がしています。

持久カトルニング Menu 5.56.3 44時 15分 ゾクト

目的 1-2-9-N/V/Lトニングによる スピード持久力の養成と  
エリゴベック(最大酸素摂取量以内)と テネゴベック(最  
大酸素を超える)の代謝を計る。



400m ヴォック

カント B	100m X 10	Time 15~16 sec	1-2-9-N/V/L	50 sec.
カント A	200m X 10	Time 33~34 sec	1-2-9-N/V/L	60 sec.
	400m X 3	Time 70~75 sec.	1-2-9-N/V/L	70 sec.
	1-2-9-N/V/L			80 sec.

カント D

	100m X 10	Time 15~16 sec.	1-2-9-N/V/L	40 sec.
	200m X 10	Time 33~35 sec.	1-2-9-N/V/L	55 sec.
	400m X 3	Time 70~77 sec.	1-2-9-N/V/L	65 sec.
	1-2-9-N/V/L			75 sec.

「8-2」 6種目 X 3 (Set) 指定まいて 番号入  
負荷は 120 まで上がるはずである。

five thru program  
Dan Rgt: 9 . 1 1 2 . 4 1 (7)

1 wicket curl	20	57.5 (4)	20	25	60	25	60	17.5	80 (7)	25 (5)	31
2 back press	20	55 (3)	20	40	70	20	60	15	80 (6)	25 (5)	31
3 rear split	20	55 (3)	20	40	70	20	60	15	80 (6)	25 (5)	31
4 ticks extension lying	20	55 (3)	20	40	70	20	60	15	80 (6)	25 (5)	31
5 tick up	20	55 (3)	20	40	70	20	60	15	80 (6)	25 (5)	31
6 heel raise	20	55 (3)	20	40	70	20	60	15	80 (6)	25 (5)	31
7 wall curl	20	55 (3)	20	40	70	20	60	15	80 (6)	25 (5)	31
8 straighten pull-over	20	55 (3)	20	40	70	20	60	15	80 (6)	25 (5)	31
9 full squat	20	55 (3)	20	40	70	20	60	15	80 (6)	25 (5)	31
10 upright row	20	55 (3)	20	40	70	20	60	15	80 (6)	25 (5)	31
11 clean	20	55 (3)	20	40	70	20	60	15	80 (6)	25 (5)	31

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
17.5	20	25	20	20	20	25	20	20	20
57.5 (4)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
60	60	60	60	60	60	60	60	60	60
17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
60	60	60	60	60	60	60	60	60	60
17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
60	60	60	60	60	60	60	60	60	60
17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
60	60	60	60	60	60	60	60	60	60
17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
60	60	60	60	60	60	60	60	60	60
17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)	55 (3)
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
60	60	60	60	60	60	60	60	60	60